巻頭言

宗祖幼少のころ仏法、世間のことについて疑問をいだき、これを解決するためには智者とならではかないがたいと、清澄山の本尊虚空蔵菩薩に願をかけ「日本第一の智者となしたまえ」と懸命の祈りをささげられた。時に「虚空蔵菩薩、眼前に高僧とならせ給ひ、明星の如くなる智慧の宝珠を授け給ふ」（善無畏三蔵抄）とも「生身の虚空蔵菩薩より大智慧を給はり」（清澄寺大衆中）と菩薩を感見、信観したことをしるされている。これは宗祖十二才の時で、この感得を得てより慧眼頓にひらけ、八宗ならびに一切経の勝劣を知ることができたといわれる。

建長六年（一二五四）正月一日、日蝕があった。このとき「生身の愛染明王を拝見し」、またこの正月十五日より十七日に至る間に「生身の不動明王をおがみ」この両明王をそれぞれ図顕されている。（不動愛染感見記）

宗祖がこのように生身の虚空蔵菩薩・愛染明王・不動明王を感見、信得されたことは宗祖の懇祈・祈請が並々でなかったことを想見することができるが、このような生身の諸尊を信観されたことは宗祖の宗教的体験として看過できぬ重要事である。特に大曼荼羅図顕にあたって右に不動、左に愛

染の梵字を図案化して勧請されたということは、生身の両尊の感見がいかに強い宗教意識下にあったかを物語るものである。

本学が三年の短期大学を改組転換して四年制大学に移行する申請は本学同窓生の宿願であるが、一昨年よりはじまった第一次の申請は本年正月七日通過し、本年は最終審査、書類、実地調査が行われる運びとなった。

顕祈顕応・顕祈冥応・冥祈顕応・冥祈冥応の四句は祈請の常道であるが、本年の審査を受けるに際し本学では止暇断眠の精進をかさねて諸般の準備を整え文部省の審査委員の諸公を迎えたいものと念願している。大学並びに同窓生諸聖の冥顕の御援助をお願いしてやまない。

平成六年三月

学長　宮崎　英修